Academic Link
Chiba University | Academic Link Center

1210あかりんアワー　教員が研究の楽しさを語る
第80回（10/28）　橘永久先生推薦　ブックガイド

※掲載されている本はL棟2階　あかりんアワーのコーナーに配架されます。

Book1

村から工場へ：東南アジア女性の近代化経験

著者：平井京之介　出版社：NTT出版

コメント：日本人文化人類学者が、タイ北部に進出した日系プラスチック工場で実施した種々の参与観察をまとめた本です。観察の中心は、1993年から94年にかけて、著者が調査対象の工場に従業員として実際に就業した際に行われています。
ところで、経済発展と経済成長の違いは何でしょうか？ある途上国で、たまたま見つかった石油の輸出が伸びて、8%のGDP成長率を5年も続けたら経済発展したといえるでしょうか？

経済成長が所得の伸びに関する概念であるのに対し、経済発展は慣習や人々の考え方の変化、社会制度の変革に重点を置く概念です。ざっくり言えば、経済発展は「近代化」という言葉に対応しています。この本を読むと、その経済発展の意味するところがなんとなく分かってくると思います。20年も前の記録ですが、多くの途上国で観察される「近代化」の活写としてその価値は全く減じていません。季節性の高い農業所得だけだった生活に、毎週定期的に受け取る賃金が加わった場合、人々の生活や考え方はどう変わるでしょうか？その賃金の受け取り手が、いままであまり現金を手にすることの無かった妻や娘達だったら？

Book2

福祉の経済学：財と潜在能力

著者：アマルティア・セン著　出版社：岩波書店

コメント：Sen, Amartya. Commodities and Capabilities, Amsterdam: Elsevier Science Publishers, 1985 の翻訳です。“人生の価値”・“良い生とはなにか”・“それをどう計測し評価するか”という著者の問いかけは、一見浮世離れしているように感じられるかもしれません。しかしすぐに、こうした問いへの解答が、経済開発の目的に深く関わることに気付かれると思います。
講演会の記録とはいえ、専門家を対象としたものであり、大学一年生の皆さんにとっては少し高度な内容です。まずは、センの思想の中枢を語った第4章までと、その思想を現実の問題にあてはめた補論に目を通すことをお薦めします。

※掲載されている本はL棟2階　あかりんアワーのコーナーに配架されます。

Book3

開発フィールドワーカー

著者：野田直人　出版社：築地書館

コメント：青年海外協力隊員・国際協力機構（JICA）の専門家として、数多くの開発援助の現場に立ってきた著者の、実体験に基づいた開発論・援助論。65章に分かれた小論構成で読みやすい本ですが、各論とも奥が深く、考えさせられる記述に溢れています。私は、現地調査に出かける前本書をパラパラと読み、心構えを整えるようにしています(例えば、2-4、5-7、5-9、等)。調査で「何を訊かないか」の重要性などは、強調してもしすぎることはありません。

あえて気になる点を二つ挙げておくと、まず筆者に、経済学への反感があるように見えることがあります。「一般論ですが」、開発フィールドワーカーや経済学以外の途上国研究者の方々には、大企業や消費者の行動原理と経済学の論理を取り違えている人が結構おられるように思われます。次に気になるのは、学生の皆さんが、著者が強調する様々な分野を学ぶことの重要性を、学際的勉強の重要性などと取り違えないか、いう点です。「私見では」、まずは専門バカになることが大切です。経済学なら、個人の合理性という色眼鏡で全てを見る訓練を積む事が重要です。専門バカになってはじめて、他の見方との違いに驚愕でき、徐々に複数の視点を持てるようになります。